高齢者における記憶の失敗とメタ記憶の関連性

—記憶の自信度（メタ記憶）が虚偽記憶に及ぼす影響—

○島内 晶^{1・2}・佐藤眞一³

(¹ 東京都健康長寿医療センター 研究所・² 日本色彩環境福祉協会・³ 大阪大学大学院)

キーワード: 高齢者, 記憶の自信度, 虚偽記憶

The relationships between memory failure and metamemory among the elderly:

The influence of memory self-confidence on false memory

Aki SHIMANOUCHI^{1,2} and Shinichi SATO³

(¹Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology, ² Japan Colors Welfare Environment Association, ³Osaka Univ.)

Key words: elderly, memory self-confidence, false memory

目 的

高齢期には、記憶の失敗経験が増加することが知られている。それらの経験は、高齢者の記憶に対する認識(メタ記憶)、特に記憶に対する自信にどのような影響を与えているのだろうか。これまでのメタ記憶研究では、実際の記憶成績とメタ記憶は関連がないことが示されている(Cavanaugh & Green, 1990 など)。しかし、高齢者を対象として、潜在記憶手続きによる記憶課題を用いて測定された記憶成績とメタ記憶の自信度の関連性について検討した研究はほとんどみられない。そこで、本研究では、実際の記憶成績を測る課題として、DRM パラダイムを用いて実験を行った。また、高齢者のメタ記憶の特性については、島内・佐藤(2008)で作成した、研究参加者に自信度を測定されているとは気付かれにくいように、行動レベルで記憶の主観的自信度を測定できる尺度(Metamemory Scale of Self-Confidence: 以下 MSSC)を用いて検討を行った。

方 法

実験および調査への参加者は、若年者(大学1年生)34名(18.76±0.53歳)、高齢者26名(76.3±4.40歳)であった。虚偽記憶の成績および正記憶の成績の測定には、DRM パラダイムを使用した(15語×6リスト、合計90語、PC使用して提示、各語2秒提示、提示間隔1秒)。再認テストは、直後再認と遅延再認(カード使用、36語連続、2秒間提示)の2回行った。メタ記憶課題は、MSSC 尺度(15項目、4件法)を用いた。なお、分析に先立ち MSSC の得点の平均値をもとに、年齢群(若年群・高齢群)ごとに、上位群(Good 群)・下位群(Poor 群)に分けた(MSSC の G-P 群)。

結 果

再認時期(直後・遅延)における正再認率および虚再認率を角変換した値をそれぞれ従属変数として、年齢(若年者・高齢者)×MSSC の G-P 群(上位群・下位群)をそれぞれ被験者間要因とする分散分析(反復測定)を行った(図参照)。その結果、正再認率に関しては、主効果、および交互作用はいずれも有意ではなかった。

虚再認率に関しては、再認時期の主効果、年齢の主効果は有意であった($F(1,56)=20.97, p<.001$: 直後<遅延, $F(1,56)=9.13, p<.01$: 若年者<高齢者)。また、再認時期×年齢の交互作用、再認時期×MSSC の G-P 群の交互作用、年齢×MSSC の G-P 群の交互作用は有意であった($p<.01, p<.05, p<.05$)ので、単純主効果の検定を行った。その結果、高齢者では、遅延再認の方が直後再認よりも虚再認率が高く($p<.001$)、遅延再認では、高齢者の方が若年者よりも虚再認率が高かった($p<.01$)。また、MSSC 下位群では、遅延再認の方が直後再認よりも虚再認率が高かった($p<.001$)。そして、MSSC 下位群では高齢者の方が若年者よりも虚再認率が高く($p<.01$)、高齢者では MSSC 下位群の方が MSSC 上位群よりも虚再認率が高かった($p<.05$)。

考 察

正再認率に有意差がみられなかったことから、MSSC で測定されたメタ記憶における自信度の高低は年齢に関係なく、正記憶の記憶成績とも関連がないことが示されたといえよう。

一方、虚再認率では、中でも再認時期×MSSC の G-P 群の交互作用、年齢×MSSC の G-P 群の交互作用がみられた。再認時期×MSSC の G-P 群の単純主効果の検定では、MSSC 下位群において、遅延再認の方が直後再認よりも虚再認率が高いことが示された。このことは、記憶に自信のない参加者は、時間を経ることで虚偽記憶を増加させてしまうことを意味している。

また、年齢×MSSC の G-P 群の単純主効果の検定では、MSSC 下位群すなわち記憶に自信がない群では高齢者の方が若年者よりも虚再認率が高いこと、そして高齢者では、記憶に自信のない群の方が記憶に自信のある群に比べて虚再認率が高いことが示された。よって、記憶に自信のない高齢者は記憶に自信のない若年者よりも、虚偽記憶が多いということになる。そして、高齢者で記憶に自信がない人はある人に比べて、虚偽記憶が多いということを示しているが、若年者に関しては記憶の自信の高低は、虚偽記憶の増減には影響していないということが推察された。本研究では MSSC によって測定された、潜在的な記憶の自信と、無意識的に生じる、すなわち潜在的記憶である虚偽記憶との関連を検討している。その結果得られた高齢者における自信の低さと虚偽記憶の増加との関連についての示唆は、虚偽記憶の低減、そしてさらには高齢者の日常場面における記憶の対処に新たな知見を見出せる可能性がある。

図. MSSC上位群・下位群および年齢における直後再認と遅延再認の各再認率の比較

引用文献

Cavanaugh, J. C., & Green, E. E. (1990). I believe, therefore I can: Self-efficacy beliefs in memory aging. In E. A. Lovelace (Ed.), *Aging and Cognition: Mental processes, self-awareness, and interventions*. Amsterdam: North-Holland, pp. 189-30

* 本研究は、平成 20～22 年度科研費(課題番号 20530609 研究代表者 佐藤眞一)を受けて行った。